

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第6号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 長岡研究室
発行：2017年3月18日

島根大学ラフカディオ・ハーン 研究会を振り返って

副会長 長岡真吾

私事で恐縮ですが、2017年4月より島根大学から福岡市の福岡女子大学に転出することになりました。大学院が終わったばかりの小生を拾ってくださったのが盛岡市の岩手大学でした。その後、出身大学院のある筑波大学に移ることになり、さらに出身学部がある島根大学に移るといふ巡り合わせに恵まれました。松江では12年のあいだ勤務いたしましたが、この地での小泉八雲研究・顕彰に引き合わせてくださったのは、当時附属図書館にいらっしゃった加本純夫さんだったと思います。『教育者ラフカディオ・ハーンの世界』(2006年)という書籍の編集に加わるよう、着任間もない小生に声をかけてくださいました。その編集会議や作業を通じて、大学時代の恩師常松正雄先生とも再会し、小泉凡さんや横山純子さん、また当時教育学部にいらした高瀬彰典先生にも初めてお目にかかりました。そして、この書籍の出版を契機にして「島根大学ラフカディオ・ハーン研究会」が発足することとなりました。縁の下の力持ちのような加本さんの熱意とご尽力があつてのことと思ひ出します。

実際に研究会が発足して、「副会長」という恐れ多い肩書きを頂いたものの、小生は当初よりほとんどお役に立てなかつたように思います。定例の研究会にも出席よりも欠席が多いくらいで、たまに出てみると、常松先生や吉川先生らがぐいぐいと会を引っ張っていらっしゃり、会場となっていた当時の八雲資料室(図書館三階)は熱気と活気に満ちておりました。教育学部でハーンを専門的に学ぶ学生さんらの出席もあり、次々に出される質問の奥深さに、小生などはひたすら縮こまってみなさんのお話を伺っていたものです。古い本の匂いのする、あの手狭な資料室が今では懐かしく思ひ出されます。

ただ、所属する学会の仕事も増えてきて、ハーン研究会にはますます足が遠のいてしまいます。

しかしある日気がつくと、常松会長のもとで読書会への参加者もどっと増え、さらに活発で腰の据わった活動が展開されていました。事務局長の横山さんのたゆまぬご尽力のおかげであることはいうまでもありません。横山さんを通じて定期的に研究会の様子や動向を知らせてもらい、可能なときは極力読書会に顔を出すようになりました。その流れから、2015年には常松先生より研究会発足10周年を記念して講演をしてほしいと文字通り身に余るお話を頂戴し、多少の恩返しになればと承りましたが、これが自分の八雲研究にとっても新しい方向を見出すきっかけになりました。ハーンが生まれた19世紀のヨーロッパ世界を大英帝国の支配という文脈で見直してみようと試みたのです。それまでハーンの両親やアイルランドでの生活などの伝記的な情報は伝記作家たちから伝えられることに基づいていましたが、別の観点から眺めてみると、大英帝国がアイルランドやイオニア・ギリシア地域を見る視線に含まれていたはずの政治的・社会的・文化的文脈にまで言及しているものはほとんどなかったように思われたのです。このときの講演内容の一部を論文の形に整理して江藤秀一編『帝国と文化』(2016年)に収録してもらうことができました。講演会の際にいろいろとご質問をくださった本研究会の方々にもあらためてお礼を申し上げます。

福岡女子大学では、英語圏の文学や文化を英語という言語を通してじっくりと学びつつ日本の文化も世界に発信できる学生を育てる所存であります。それはまさにハーンの世界と人生そのものでもあるように思います。また日本で学ぶ留学生向けの授業も担当する予定ですが、ぜひ小泉八雲を教えて欲しいとすでにお問い合わせされています。西川盛雄先生はじめ熊本の研究仲間たちも、近くなるからと声をかけてくださいます。今後もハーンとの縁は続きそうです。それにつけても、近くても遠くても変わらず常に身に余る程のお励ましをくださり続け、研究上のインスピレーションを継続して与えてくださる常松正雄先生には、感謝してもしすぎることはありません。生涯の師と仰ぐ先生に、この場をお借り

してあらためて心よりお礼を申し上げます。そして、わが研究会のみなさま、松江の地は一時離れますが、こちらが地元でもありますのでしばしば戻ってまいります。おそらく（お恥ずかしいことに）今までとあまり変わらないくらいの出席率で戻ってまいりますので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

【 研 究 小 論 】

法文学部言語文化学科4年
横山竜一郎

小泉八雲と「しゃがみ」

1990年代後半から2000年初頭にかけての日本で、「ジベタリアン」という言葉が流行した。街中で地面にしゃがむ若者を指していたこの言葉は、総じて否定的な意味を含んで使用されていたように感じる。私も小学生ぐらいだったか、学校の先生から「お前ら、ジベタリアンか」と叱責された記憶がある。

2003年に自主制作で販売されたあるCDには、まさに「ジベタリアン」という名前の曲がある。降神（おりがみ）というユニットのMC、志人（しびつと）が歌うこの曲は、次のフレーズが印象的だ。「町は一回しゃがむと全く違った景色並ぶの / 発達しちゃったアジアならず者のボロボロ長ズボンの裾 / 恥じらいも無く学ぶと やっぱ筋が合った友と鼻歌 / 末端担った時のアナウンサー / ほのぼの顔で楽しそう」⁽¹⁾

先日、友人と電話をしていた時、この曲の話を発端に「しゃがみ」という行為について三時間近く夜中に話をする事となった。「しゃがみ」にはどれぐらいの種類があるのか？なぜ人間はしゃがむのか？当時の日本はしゃがまざるを得ない文化圏にあったのではないのか？地域や年齢によって差異があるのではないのか？など。これらの会話を現在思い返して興味深いのは、私達が「しゃがみ」をほとんど肯定的なものとして捉えていたことだ。

さて、この場で唐突に何の話をするのかと思われるだろうから、そろそろ本題に移りたい。「しゃがみ」と小泉八雲に、一体どんな関係があるのか。このことについて、本稿は「日本の庭にて」(“In a Japanese Garden”)という作品を主に取り上げて、思うところを自由に書いていく。研究というよりも個人的な印象や感覚が強いが、お許し願いたい。

「日本の庭にて」を取り上げるのは、私が昨年末に島根大学小泉八雲研究会に入会したとき、ちょうど読書会で読まれていたからだ。この読書会、普段

あまり関わることの少ない年齢層の方のお話を聞くことができ、私のような若者は恐縮してしまうのだけれど、会員の方々のコメントが非常に面白い。「日本の庭にて」でも、鋭い指摘が飛ぶと私も思わず姿勢を正していたが、どこかのタイミングでそれが一々崩されてしまったのだ。途中、誰かが「しかし、八雲さんは細かいところまでよく見えていますねえ」と声を漏らすことが頻繁に起きたのだ。すると、和やかな雰囲気になって全員が頷きながら笑う。なぜ、このようなことが起きていたのだろうか。

「日本の庭にて」に限らず、「知られぬ日本の面影」(*Glimpses of Unfamiliar Japan*)に収録されているような、いわゆる紀行文は、八雲の有名な怪談作品よりも、ある意味で奇妙なものが多い。何より、そこに描かれている八雲の態度や感じ方、文章そのものが特徴的なのだ。例えば、私の地元である島根県松江市のことが詳細に書かれた「神々の国の首都」(“The Chief City of the Province of the Gods”)なんて、所々の抜粋が観光パンフレットに書かれたりして、「あ、綺麗な文章ですね」程度で済みそうに思われるが、朝起きて寝るまでの日記形式が基本であることや、にもかかわらず情報量が過剰であることや、耳に入る音への意識が強くそれを言葉の音やリズムで表現しようとしていることなど、自分が読んでいるのはエッセイなのか物語なのか詩なのかよく分からなくなってしまう。

同じように、「日本の庭にて」も奇妙な作品だ。冒頭では、現在の小泉八雲旧居に引っ越すことになった経緯が簡単に紹介され、すぐに「庭が美しいのだ」と進む。そこから、日本の庭園の特徴、西洋との違い、石、樹木など、驚くべき量と密度の情報が語られる。わらべ歌や民話を織り交ぜながら、縦横無尽に話が続いていく。八雲の民族学者としての声である。言うまでもなく、八雲がこれらの領域を専門的に研究していたわけではない。したがって、いくつか記述の誤りも存在するだろう。だが、そのことは問題ではない。ここで読まれるべきは、記述の正確さではなく、これほどの情報を紹介するまでに至る八雲の態度だろう。まさに、「八雲さんは細かいところまで見えていますねえ」と感心してしまうことこそが大切なのである。

こうしたオブセッションめいた八雲の観察欲は、一体何なのか。この問いは大きすぎるが、彼が膨大な知識と経験を得ることが可能になったのは、たとえば一つに「オープン・マインド」という言葉があるだろう。開かれた精神を持っていたから、多様な文化に接することができた。八雲という人物を説明するにもびったりだ。しかし、この精神は彼のどのような行動へと結びついたのであるか。旅を続けたこと？散歩を楽しんだこと？それもあるだろう。ここでは、もっと些細な身体行動に注目したい。しゃ

がんだことである。

「日本の庭にて」の最終章で、八雲は次のように述べている。

Each day, after returning from my college duties, and exchanging my teacher's uniform for the infinitely more comfortable Japanese robe, I find more than compensation for the weariness of five class-hours in the simple pleasure of squatting on the shaded veranda overlooking the gardens.⁽²⁾

毎日学校の勤めから帰ってくると、まず教師用の制服からずっと着心地のよい和装に着替える。そして、庭に面した縁側の日陰にしゃがみこむ。こうした素朴な楽しみが、五時間の授業を終えた一日の疲れを癒してくれる。⁽³⁾

「延々と連なる庭についての描写と説明に端を發したのは、この習慣ではないだろうか。そう考えると、この作品での異常なほどに細かい記述は「しゃがみ」が大きな役割を担っていたとすら思えてくる。

われわれは、一日の活動時間の多くを、歩行を含め、立っている状態か椅子に座った状態で過ごしている。この状態で毎日同じような生活をする、視線は固定化される。ところが、しゃがむとこれが変化する。地面に近い視線から、あえて比喩的な表現をすれば、人の目ではなく虫の目から、世界を認識することになる。これまで意識していなかった、細かい点が視界に入ってくる。それだけではない。一定時間しゃがんだ後に立ち上がるとどうなるか。いつもの固定化されていた視界が、別のものに見えてくるはずだ。直前まで細かな部分を観察していたからこそ、立ち上がるだけで視界が広がって見えるのである。「日本の庭にて」の記述を支えているのは、こうした一連の運動に伴うものの見方ではないだろうか。

しかし、「しゃがみ」にはさらにもう一段階の見方について来るのかもしれない。「日本の庭にて」の最後に、八雲はこの庭もいずれは無くなり変わり果てた姿になるだろうと予測する。近代化する日本の将来を、見ることでできない未来の情景を見ているのである。これに関連して、興味深いエピソードがある。八雲の曾孫である小泉凡氏は、以前次のような話をしていた。自分の息子がまだ小さい頃、ある日の夕方に家で奇妙なことが起きた。息子が机の下にしゃがみこんで、「へるんさんが夕日を見てすましている」というようなことを言ったそう。聞くと、その頃はよく机の下にしゃがみこむことが多かったらしい。私が最初に紹介した電話の相手の友人も、幼い頃はしゃがむことが多く、その時はやけに感覚がクリアになった記憶があるという。しゃが

むことで、目に見えないものすら見えるのかも知れない、という荒唐無稽な考えすら浮かんできそう。

このように考え始めると、冒頭で述べた「ジベタリアン」という言葉も別の意味を帯びてくる。同名の曲にあるように、しゃがむことでわれわれは「全く違った景色」を見ることができる。八雲が「日本の庭にて」を書いてから約100年後、実際に「発達しちやったアジア」に住んでいた日本人は、庭ではなく路上でしゃがむようになった。勿論、社会的には非難される行為かもしれない。ただ、彼らが見ていた景色はどのようなものだったのだろう。八雲は、ジベタリアンについてどう思うのだろう。もしかしたら、一緒になって路上でしゃがみながら日本を見たのかもしれない、などと夢想してしまう。

2017年3月で、島根大学の教授であり、この研究会でもご活躍された長岡真吾先生が島根大学を去ることになった。個人的にも非常にお世話になり、たいへん感謝し尊敬している先生の一人だ。その長岡先生から、先日メールを頂いた。その中で先生は、私に八雲の有名な言葉を送って下さった。“All good work is done the way ants do things – little by little.” 私はまだ若い。この拙稿を書くのにも多くの時間がかかったし、至らない点も多いだろう。それでも、今は蟻という小さな虫のように、ゆっくりと地道に進んでいくしかない。過信して足元を救われることのないよう、時にはしゃがんで地面を見ながら。長岡先生に感謝を込め、新たな地でも健康で変わらぬご活躍をお祈りしています。

注

1. 降神『降神』(2003年、自主制作CD-R版 / 2005年)収録曲「ジベタリアン」より
2. Hearn, Lafcadio, “In a Japanese Garden” in *Glimpses of Unfamiliar Japan* (Charles E. Tuttle Company, 1976) p. 382
3. 小泉八雲著、池田雅之訳『新編 日本の面影』(角川ソフィア文庫 2000) p. 258

【 読書会に参加して 】

山崎 敬

ハーンの読書会に初めて参加させていただいたのは、かれこれ三年位前だとおもいます。わたくしは松江ボランティア協議会に所属していて、常松先生の奥様を通じて紹介いただき、入会させていただきました。

当初、ハーンの英文を和訳して研究する学術的な集まりだろうかとおもい、英語の読解力のなさもあ

り、入会にいたるまでは1年位躊躇しました。

その後入会時に、常松先生から『来るものは拒まず』と、おっしゃっていただいて、気楽な気持ちで読書会に参加しておりました。

会員は元々、英語専門の現役の教師や元教育者の集まりを中心とした方々なので実際のハーン作品に皆さんが流暢に和訳されるのを拝聴しながら、当分、翻訳の順番から除外していただき、門前の小僧のように皆さんの和訳や、解説などをきき自分自身満足していました。

やがて事務局より和訳の予定当番箇所を告げられ自分でハーンの英文に取り組み、苦手な長い英文和訳に悪戦苦闘いたしました。

初当番日に当番箇所を英文和訳したところ、自分でもかなり緊張したのかハーンの英文を読み上げながら日本語に翻訳するのですが、文脈にそって和訳をこころみると、日本語的な文章のいいまわしにならず、自分でなにを話しているのか分からなくなりました。

当番箇所をひととおり終わって、会員の皆様の質問、添削を頂いた後、自分の英語力のなさを実感して、入会した自分が惨めな気分になったのを思い出します。

最近、相変わらず英語力はないのですが、自分なりにハーン文章にもなれ、日本の文化、風習を深く愛し、理解した造詣のあるハーン文章表現も楽しめるようになりました。

ハーン読書会を通して、日本文化と明治の初期の出雲文化を改めてほんの一部ですが知る機会を得たことは貴重でした。

普段は地元の郷土史などあまり興味がないのですが、当時の日本人（出雲人）が少なくともどのような価値観、死生観をもって生活していたか、ハーン作品に登場する人物を通して生き生きと感ずることができ、ハーン読書会会員の皆様の解説を交えながら、わずかながら理解でき、私にとって非常に興味深い時間を過ごさせていただいています。

ハーンがそこまで深く日本文化に傾倒し作品としてのこしてくれたことに感謝しつつ、日本人である私が、伝統的な日本文化をあまり知らないのは恥ずべき事なので、今年から手始めに歌舞伎をみてやろうと観劇をはじめております、もちろん、費用のかかることなので、やりくりしながら自己投資して、松江城ボランティア活動のおりに役立てようとおもっている今日この頃です。

皆様、未熟なわたくしではございますが、何卒ご指導よろしく願います。

【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

第90回例会

2016年11月19日（土）14:00~16:00
島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2
11名参加 “In a Japanese Garden”
374.1-380.4.

第91回例会

2016年12月17日（土）14:00~16:00
島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2
13名参加 380.5-384.34.

第92回例会

2017年1月21日（土）14:00~16:00
島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2
14名参加 “In a Japanese Garden”等の討論 &
“Of a Promise Broken” 15.1-19.20

第93回例会

2017年2月18日（土）14:00~16:00
島根大学附属図書館ラーニングコモンズ2
13名参加 “Of a Promise Broken” 19.21-26.7
“The Reconciliation” 5.1-7.9.

『教育者ラフカディオ・ハーンの世界』の出版や立ち上げ準備会を経て生まれた島根大学ラフカディオ・ハーン研究会はこれまでに10年位の歩みをしてきて、感慨ひとしおです。最初は島根大学教職員・旧教職員、卒業生、学生等を中心にこじんまりと始まった研究会でしたが、幅広く市民の方々が参加される会となり、活動も広がってきたと思います。

その間、事務局は長岡先生に大変お世話になりました。長岡先生は事務局の窓口になってくださり、研究会宛の郵便物を受け取ってくださったり、教室を借りる時は手配してくださいました。また副会長として長岡先生はお忙しい合間に読書会に顔を出してくださり、いろいろ貴重な提言をしてくださいました。10周年記念講演会では講演をしてくださいました。福岡に赴任されても長岡先生の今後のご活躍をお祈りしております。4月から島根大学ラフカディオ・ハーン研究会の事務局の所在地は、同じく島根大学法文学部の渡部研究室に変わります。今後とも相変わらずどうぞよろしく願います。

編集後記：長岡先生の益々のご活躍をお祈りいたします。また、2点のご寄稿、特に新進気鋭の会員からの論文、大変ありがとうございました。（高橋栄）
